

意見集約シート

検討（議論）のテーマ	テーマに関する意見（会議での発言要旨）
テーマ① 「文化」か「観光」か	「人・まち・歴史」があって、その上に文化があり、さらにその上に観光が成り立っている。地域の方々のやる気と歴史を疎かにした観光は絶対に続かない
	地域に歴史があり、それを語る語り部がいて、その上に成り立っていくのが観光である「フィロソフィーとストーリー」
	（いち伊賀市民として）観光活用としての側面は難しい印象
	文化か観光かではなく、一緒にやっていかなければこの町の将来は無い
テーマ② （無形民俗文化財（行事）としての）維持・継承	昔は財力もあったので、だんじりは自分の町のものだと思っている人は多かったが、まつり町として今は、「だんじり・鬼は伊賀市のものと考えよ」と伝えている
	祭りを実際にやっている地域の人とそれ以外の地域の人との熱量に温度差がある。伊賀においても旧上野市だけでなく郡部の子供たちもダンジリ行事を知る場所になるとよい
	市の施設だと特定の一部のエリアの住民だけの施設という認識でなく、市域全体としてのメリットや役割がある施設になっていくべきという考え方が必要
	郡部の人にとっては遠い存在・図書館に訪れたのは1回あるかどうか。昔の記憶だが会館は暗くて怖いイメージ。
	長浜市の曳山博物館の中はだんじりの修理場や子供歌舞伎の練習場になっている
コロナ禍や事故により昔（本来の）祭りの姿を取り戻せていない地域もある中で、半年に1回のだんじり会館への入れ替え作業は、祭り町の人々の祭りへのモチベーションの維持の観点で寄与している	

意見の整理（共通認識）	あるべき姿に関する論点	議論のポイント	伊賀市の状況	他市事例
文化（だんじり行事）観光は、地域（まつり町）の人・歴史・熱量の維持があった上で成立するものである	地域（まつり町）の人・歴史・熱量の維持をどのように図っていくのか			御車山会館（富山県高岡市）
	無形民俗文化財を地域資源とした（テーマとした）観光※のあるべき姿／必要性・重要度は？ ※特に祭事の期間以外における来訪	「見えないもの」を「魅力的に見える化」する手法、必要性		無形民俗文化財をテーマとする観光事例
市全体におけるダンジリ行事に対する認知、興味関心の醸成が重要である	伊賀市民全体が無形民俗文化財に触れる場所やタイミングはどうあるべきか	（無形民俗文化財（行事）としての）維持継承の観点から、だんじり会館としてどのような役割を担うべきなのか	（市民への認知・興味関心の醸成の観点から）「誰が」「どういった取組」を行っているのか	
			今のだんじり会館では「誰が」「どういった取組」を行っているのか	
地域（まつり町）におけるモチベーションの維持や継承の場づくりは必要である	地域（まつり町）における行事の継承やモチベーションの維持の課題に対し、市全体としてどう考えるべきか		（維持継承の観点から）「誰が」「どういった取組」を行っているのか	曳山博物館（滋賀県長浜市）

検討（議論） のテーマ	テーマに関する意見 （会議での発言要旨）
テーマ③ （有形文化財としての）保全・保護	<p>だんじり会館設立当時から、まつり町では会館でのだんじりや幕の保管状態に対して、温湿度や陳列方法にネガティブな意見が多かった</p>
	<p>だんじり会館の開館当時は、お祭り法案（略称）ができて全国各地で祭りを常設的に見せる施設が建てられたが、文化財保護の観点から、常設展示は温度・湿度の面でだんじりや幕にとっては良くないへのダメージが大きい。重要文化財の基準であれば100日を超さないという規定がある中で、観光に振れることで重要なものが劣化し失われることを心配していた。一方で、祭りは地域にとっても大事なものであり、それを広く知ってもらおうということも大事である。両方の側面でどのようにバランスを取るかということも、当時地域内では議論がなされてきたし、悩みもあった。当時は（今よりも）地域も常設展示に否定的であった</p>
	<p>長浜市は修理に熱心に取り組んでいるという印象。会館は修理センターという重要な意義を持っている</p>
テーマ④ 施設の運営（維持管理）／地理的な視点からのあるべき姿	<p>80年の月日を経て、一つの施設が同じ体制、同じ仕組みで続けるのは難しいことかと思う。周りの環境、社会情勢、価値観が変化している中で、変わっていくことは当然</p>
	<p>今のだんじり会館は、観光売店としての機能も有しており、観光協会の事務所としても活用している。観光協会が指定管理者として健全な維持管理をするための方策として忍者衣装の貸し出しを行っている。</p>
	<p>35年前は会館の目の前に市役所、中心市街地には大きなスーパーもあり町が賑わっていたが、市役所が移転し、旧庁舎が図書館に生まれ変わろうとしている。さらに同時並行で美術博物館構想も旧桃青中学校跡地へ建てる動きをしていることも勘案すると、だんじり会館の持つ意味もこれらに連動していくことで、町にとって魅力的な施設に好循環になると思う。 周辺環境の変化や将来像を見据える中で、どのような機能を備えた施設が良いのかを長期的な視点から地域にとっていい点、市外の来訪者にとっていい点を総合的に考えていくことが大切</p>
テーマ⑤ 文化振興によるまちづくりの全体像	<p>「エコミュージアム※」という考え方から、市民が中心になって地域の文化を自らが多くの人に広めていくという活動がある。「次世代の子供たちに地域を知り愛着をもってもらう」という取組がこれまで欠けていたので、子供たちに美術博物館に訪れてもらいそれに取り組んでいくということも大切</p> <p>※ある一定の文化圏を構成する地域の人々の生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館（文部科学省）</p>
	<p>商工会議所などが取り組んでいるまちづくりの観点でも、美術博物館が担う役割などもあると思うし、それを調整できる学芸員等の人材が必要と感じる。それらを考えていくためにもちょうど良い時期が来ていると思うので、色々課題は多いが、この委員会の議論を深めていきたい。</p>
	<p>常滑市の陶磁器会館は、「陶磁器のまち＝常滑」のランドマークとして、人の回遊につなげていっている。さらに付近にある「陶の森資料館」を中心にまち歩きを楽しんでもらう仕組みを作っていくことで町の中での連携が進んでいき、結果的に人が回遊することで、地域の人によって認知されるというかたちが形成されている点は、学ぶところが多い。</p> <p>だんじり会館の映像は、伊賀を訪れた人に伊賀上野の町を知っていただくためには良くできたツール</p>

意見の整理（共通認識）	あるべき姿に関する論点	議論のポイント	伊賀市の状況	他市事例
（保全・保護の観点からは）有形文化財の実物展示は課題も多い	有形文化財の保全・保護と無形民俗文化財（行事）の伝承の両立はどのように図るべきか	本物（実物）の展示は必要か（入れ替え行事のモチベーション維持との相反性）		他地域では本物を展示しているのか
		有形文化財の「保全・保護」と「活用」はトレードオフなのか		他地域の施設はどのように「保全・保護」しているのか
			伊賀市におけるだんじり修理はどのように行っているのか	曳山博物館（滋賀県長浜市）
	（不変である）だんじり行事そのものを正しく伝承していく必要がある中で、変化する周辺環境や社会情勢に対し何を变えていき、何を守るべきか	施設全体としての機能や役割はどうあるべきか。複合化はどのように考えるべきか。運営面での課題は何か		
			施設の収益性と文化振興の両立はどのように図っていくべきか	
	周辺環境の変化や将来像を見据える中で、地域と市外の来訪者の双方にとって良い機能を備えた施設とは？	だんじり会館のある場所における（位置的な視点からの）あるべき姿		
「次世代の子供たちに地域を知り愛着をもってもらうこと」は、まちづくりや文化振興全体の共通テーマである	美術博物館構想と一体的に検討できる（すべき）点はあるか（回遊性、人的な確保（学芸員）などの観点）			
			伊賀市（上野城下町）における、文化振興・文化観光のランドマーク、ゲートウェイの考え方は？	陶の森資料館（愛知県常滑市）